

報告課題⑩ 第3回テストに向けて（復習プリント）

●表面『伊勢物語』筒井筒

係り結びの法則

文は通常、終止形または命令形で結ばれるが、係助詞の「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」が文中で使われる場合、独特な結び方をする。

係助詞	文末の形	意味
ぞ	連体形	強意
なむ		
や		
か	疑問	強意
こそ		
こそ	已然形	強意

◎レポート⑩で、
秋来ぬと目にはさやかに見えねども風のおとにおどろかれぬ
という和歌を題材に、「ぬ」を適切な形に改めるといふ出題をした。上に「ぞ」があるために「ぬ」（終止形）から「ぬる」（連体形）に活用しなければならぬという問題であった。

「筒井筒」には多くの係り結びの箇所があるので、いくつか挙げておく。

・男はこの女をこそ得ぬ（意志「む」已然形）と思ふ。 訳：この女と結婚したい！

二①・聞かでないありける（過去「けり」連体形） 訳：聞き入れずにいたのだったよ！

②・君ならずして誰か上ぐべき（推量「べし」連体形） 訳：あなたでなくて一体誰が上げるのでしょうか？

禁止の表現

雲な隠しし 呼応の副詞「な」と、終助詞「そ」で挟まれた動詞を禁止する表現。 訳：雲よ、（生駒山を）隠すなよ。

序詞・掛詞

風吹けば沖つ白波たつた山 夜半にや君がひとり越ゆらむ
（立つ・竜）

・昔は、海水が風にあおられて背が高くなることを「立つ」と表現した。そこで竜田山の「たつ」を言い表すために「風吹けば沖つ白波」と「立つ」を連想させる前ふりの言葉を使っている。これを序詞はつちごという。

・この和歌の後半では「竜田山を夜中にあなたがひとり越えていくのだろうか」と、全く、前半の沖の方で波が高く立っている様子とは関係ないものを詠んでいる。後半のことを言いたかったのであり、前半は飾りであることが分かるだろう。

・序詞によって導き出された、本来言いたかった「竜田山」と、同音の「立つ」で二つの意味を持たせたような、ダジャレのような表現を掛詞かけごという。

主人公、在原業平？

この物語に出てくる男は、在原業平ではないか、と言われている。なぜそう言えるのか、というと、『伊勢物語』に出てくる和歌がすべて、在原業平のものだからである。彼は、「六歌仙」にも挙げられる歌の名人だが（他に、大友黒主・喜撰・小野小町・僧正遍照・文屋康秀）、実名では出てこられない事情があったのではないかとされている。

百人一首に無し。

藤原氏と争って敗れ、でも歌の名人であることは疑いようがないから？

樋口一葉『たけくらべ』のタイトルル原案

- ・筒井筒井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに
- ・くくし振り分け髪を肩過ぎぬ君ならずして誰か上ぐべき

この二首からの命名とされる。

樋口の『たけくらべ』は、幼馴染の男女二人が別々の人生を歩みだそうとするまでを書いた短編小説。少年・信如は

仏教の学校へ入学、少女・美登利は遊女として売られていく。その二人が同じ小学校に通っていて、お互いを気にしないながらも、何も言いだせないまま、それぞれ別の道を行くというせつない物語である。

●裏面『平家物語』

音便について 『平家物語』は、琵琶法師が琵琶の音に合わせて語ったものであるため、音便形が多用される。言いやすさ、戦場の臨場感が出るなどの効果が期待される。

- ・二騎になって「なりて」の促音便：促音「っ」と詰まる音
- ・何によつてか「よりて」の促音便
- ・打つて行く「打ちて」の促音便
- ・取りついで「つきて」のイ音便
- ・口惜しう「口惜しく」のウ音便：…など。

※本文には出てきていないが、「撥音便」「ん」の音に変化する）もある。（接続助詞は「で」と濁る。）

（例）飛んでくる（飛びて）、歩んで（歩みて）、飲んで（飲みて）：…など。



武士の意地の表れ？ 『平家物語』では、使役の「す」「さす」が受け身の意味を表す場合があるので、特に注意する必要があります。これは、武士が相手からなにかをされたという受身の表現を嫌って、あくまでも自分が主人公で相手にそうさせたという表現を好んだ、ということである。これはまさに武士用受身表現、軍記用受身表現ともいうべきものである。

・『監物太郎をも討たせ候ひぬ』（監物太郎も討たれました）『平家物語一知章（ともあきら）最後』（討たれたのではなく、討たせてやったのだ、ということ。）

平家物語』作者について…レポートでは「兼好法師が記した」（ ）とあるだけで、教科書にも学習書にも解答となる書名がないという質問をいくつか受けた。ただ、兼好法師の作品については、今年すでに学んでいるはずである。まず、その作品名を思い出してみようだろうか。

徒然草』百二十六段より

後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古の誉ありけるが、楽府の御論議の番に召されて、七徳の舞を二つ忘れたりければ、五徳の冠者と異名をつきにけるを、心憂き事にして、学問を捨てて遁世したりけるを、慈鎮和尚、一芸あるものをば下部までも召し置きて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひけり。

この行長入道、平家物語を作りて、生仏といふ盲目に教へて語らせけり。さて、山門のことを、ことにゆゆしく書けり。九郎判官の事はくはしく知りて書き載せたり。蒲冠者の事は、よく知らざりけるにや、多くのことを記してもらせり。武士の事、弓馬のわざは、生仏、東国のものにて、武士に問ひ聞きて書かせけり。かの生仏が生れつきの声を、今の琵琶法師は学びたるなり。

傍線部以降の訳

行長は平家物語を作つて生仏という盲目の僧に教えて語らせた。そこには延暦寺のことが見事に書いてある。源義経のことも詳しく書いて載せてある。源範頼のことは、良くわからなかったのだろうか、多くのことを書き漏らしている。武士や合戦の技術のことは、生仏が東国の者なので、武士に質問しながら書いたものだ。あの生仏の生きていたころの風情を伝える声を今の琵琶法師は学んでいるのである。